

通し番号	4420
------	------

分類番号	21-24-12-02
------	-------------

(成果情報名) 寒玉系キャベツの適品種を用いた夏まき4月どり作型の開発
[要約] 加工業務向けキャベツの端境期となっている4~5月のうち、4月どりについては、裂球及び内部品質の低下しにくい寒玉系キャベツ品種を用いて、8月上旬から下旬播種の夏まきで栽培し、収穫時期を4月まで引き延ばすことにより対応できる。
(実施機関・部名) 神奈川県農業技術センター・野菜作物研究部 連絡先0463-58-0333

[背景・ねらい]

加工業務用適性の高い寒玉系キャベツの4~5月どりは、抽だいや不結球等によって生産が安定しない。そこで、4月どりについて、寒玉系キャベツの適品種を用いた新作型を開発する。

[成果の内容・特徴]

- 1 寒玉系キャベツ品種‘冬くぐり’、‘冬のぼり’、‘YR冬景色’、‘夢ごろも’及び‘T-520’を用いて、8月上旬から下旬播種、9月上旬から下旬定植すると、収穫期を引き延ばしても裂球及び内部品質を低下させずに4月に収穫することができる(図1)。
- 2 上記の寒玉系キャベツ品種の特性は、結球重や抽だい程度、芯割合などに違いがあるが、いずれも夏まき4月どり作型に適する(表1)。また、結球重は4月上旬で2kg、4月下旬で2.5kg以上となる。花芽は4月以降、目視で確認できるまで生長するが、商品価値に影響する程度ではない。芯割合も各品種とも3~4%程度である(図2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 標準的な栽植密度は、畝幅×株間=60×35cm(4,760株/10a)、地床育苗とする。
- 2 8月上旬播種ではやや裂球しやすく、9月播種では4月以降に抽だいする危険性が高い。
- 3 ‘T-520’は採種上の都合で、メーカーより種子は市販されていない。
- 4 温暖地および一般地に適用可能である。

[具体的データ]

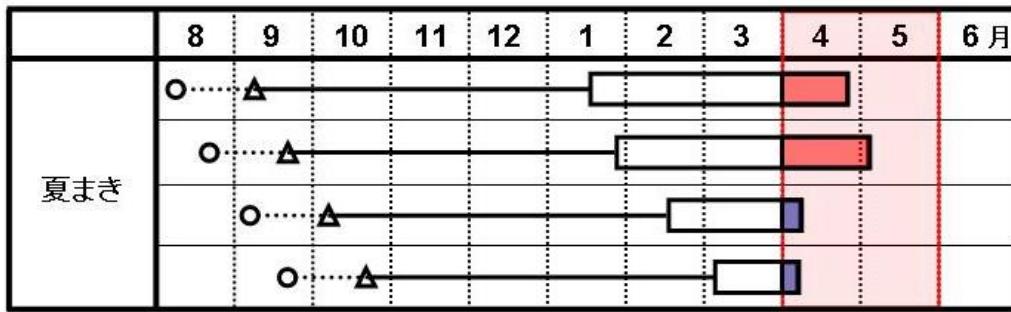


図1 4月どり寒玉系キャベツの基本作型

○：播種、△：定植、□：収穫期

表1 夏まき4月どり作型における寒玉系キャベツの適品種の特性^z

品種	結球重 (g)	球高 (cm)	球径 (cm)	球形指数 ^y	結球緊度 ^x	芯径 (cm)	芯長 (cm)	芯重 (g)	芯長/球高	芯割合 ^w (%)	抽だい程度 ^v
冬くぐり	2,640 a	15.9 a	22.0 b	0.73 a	0.64 a	4.6 a	10.7 b	104 a	0.67 b	4.0 a	1.5 c
冬のぼり	2,147 b	15.1 b	20.6 c	0.73 a	0.63 ab	3.6 c	11.1	82 b	0.73 a	3.9 ab	1.7 bc
YR冬景色	2,491 a	14.6 c	22.6 ab	0.65 c	0.63 ab	3.9 b	10.1 c	84 b	0.69 b	3.4 c	1.5 c
夢ごろも	2,638 a	15.6 a	22.8 a	0.68 b	0.61 b	4.0 b	11.5 a	97 a	0.74 a	3.7 b	2.0 ab
T-520	2,493 a	14.4 c	22.5 ab	0.64 c	0.64 ab	3.9 b	9.8 c	82 b	0.68 b	3.4 c	1.5 c

z: 2007年: 8月24日播種、9月25日定植、2008年: 8月25日播種、9月25日定植、値は2008年及び2009年の3月下旬～5月上旬に調査した個体の平均値、y: 球高/球径、x: 結球重/($\pi/6 \times$ 球高 \times 球径 \times 球径)、w: 芯重/結球重 $\times 100$ 、v: 縦断面の目視により、0: 頂花蕾が確認できない(花芽分化なし)、1: 頂花蕾確認、2: 頂花蕾伸長初期(脇芽確認)、3: 頂花蕾伸長(脇芽の肥大)、4: 頂花蕾伸長甚大(節間伸長開始)(球内抽だい)の5段階で評価(抽だい程度3に達するまでは出荷可能)。異なるアルファベット間にはTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり

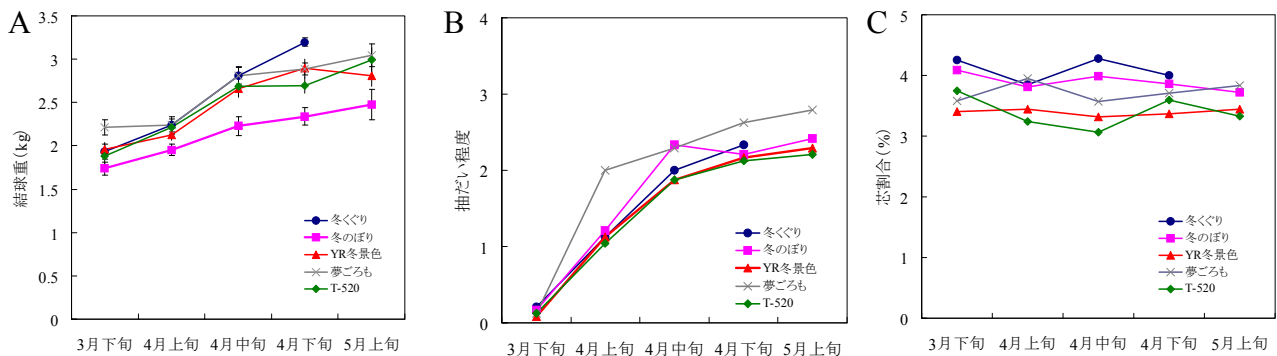


図2 夏まき4月どり作型における寒玉系キャベツ適品種の主要特性の時期別変化

A: 結球重、B: 抽だい程度、C: 芯割合。耕種概要等については表1参照。バーは標準誤差 (n=24)を示す。

[資料名]平成20、21年度試験研究成績書(野菜)

[研究課題名]業務用春キャベツの品種・栽培技術及び作型開発

[研究期間]平成18～22年度

[研究者担当名]太田和宏・高田敦之(三浦半島地区事務所)・北浦健生・北宜裕